上越教育大学研究紀要　第35巻　平成28年３月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 35, Mar. 2016

袋小路文の再分析と取り消し可能性について(1)*

加　藤　雅　啓**

（平成27年８月19日受付；平成27年10月15日受理）

要　　旨

本稿では，曖昧性を含む文の解釈に関して，統語的にコード化され，意味論的に規定された解釈と推論により語用論的に導かれた解釈について，袋小路文（garden-path sentence）における再分析（reanalysis）の手続きと，語用論における「取り消し可能性（cancelability）」がどのように関わっているかということについて検討する。その際，即時性の原則（immediacy principle），暫定付加方略（Tentative Attachment Strategy）等の方略について、その概略を紹介する。

KEY WORDS

cancelability	取り消し可能性	delayed processing	遅延処理
garden-path sentence	袋小路文	immediacy principle	即時性の原則
inference	推論	pragmatics	語用論
reanalysis	再分析	Tentative Attachment Strategy	暫定付加方略

1　はじめに

富山県内のある社会福祉センターの入口に案内板が置かれており，そこに次のような文が書かれているのを見かけたことがある。

(1)　ここではきものを脱いでください。

この表示を見て，履物を脱ぐことを求めているはずだが，一瞬，着物を脱ぐのか，といぶかしく思った。しかし，常識的には「履物を脱ぐ」のであろうと解釈した。この一瞬の逡巡は，この文が次の２通りに曖昧であることによるものであろう。

(2) a．ここで　はきものを　ぬいでください
　　b．ここでは　きものを　ぬいでください
(3) a．ここで履物を脱いで下さい。
　　b．ここでは着物を脱いで下さい。

(1) の文頭の語句を「ここで」と解析すれば，(2a)，及び（3a）の解釈が導かれることになる。一方，これを「ここでは」と解析すれば，(2b)，及び（3b）の解釈が導かれることになる。副詞句である「ここで」，あるいは「ここでは」は，(4)，(5) に示すように，場所を表す表現として一般的によく用いられる表現である。したがって，(1) を解釈する際，統語的には，(2a)，あるいは（2b）と解析することは，無理のないことと思われる。

(4) a．ここで文学に出会うのは偶然ではありません。
（佐藤幹夫著　『村上春樹の隣には三島由紀夫がいつもいる』）
　　b．自分の記録を破られないようにすると，部下をダメにします。ここで選択肢が分かれます。
（中谷彰宏著　『40歳を過ぎたら「これ」を捨てよう』）
(5) a．昭和７年の正月，倫敦に渡ってゆきましたが，ここでは寒さに閉じこめられて，落ちついて読書することが出来ました。
（林芙美子著　『文学的自叙伝』）

**人文・社会教育学系

b．賞と名のつくものはいくらでもある。その多くが巨費を投じて周知につとめるなか，ノーベル賞は世界一栄えある学術賞として広く認識されている。ここでは製品そのものがブランドだ。ノーベル賞という「製品」の権威，重みがすべてを物語る。
（スティーヴ・ストリッド，クロウス・アンドレアソン著，永井二葉訳『北欧流ブランディング50の秘密』）

仮に，(1) は (2b) のような構造の文であると思って解釈をしたところ，公共の建物の入口で着物を脱ぐという行為は，一般的にふさわしくないという百科事典的知識が働き，(1) の文頭に戻り，文構造を再分析することになる。そして，(2a) のような構造を導き，結果として (3a) の解釈を導くことになる。

(1)のように，ある構造の文であると思って解釈を始めたが，途中で別の構造であることが判明して，構造解析をやり直さなければならない文を袋小路文（garden-path sentence）という。本稿では，袋小路文（garden-path sentence）における言語処理のモデル，とくに再分析（reanalysis）の手続きと，語用論における「取り消し可能性（cancelability）」がどのように関わっているかということについて検討していくことにする。

2　言語処理モデル

2．1　即時性の原則

言語情報は音声，または文字が連続して人間の耳や目などの感覚器官を通して大脳で処理される。音声言語は発話された瞬間に消えて無くなる。文字言語は見落とした場合など，冒頭に戻って読み返すことはできるが，文の処理を一旦中断しなくてはならない。われわれはどのように言語情報を処理しているのであろうか。この課題に対して，Frazier and Rayner (1982)は，袋小路文を読む際の眼球運動を観察した実験結果から，次のような即時性の原則（immediacy principle）を提案している。

(6) The overall view of sentence processing suggested by the results is one in which the parser immediately assigns local structure to fixated items and notes any structural incompatibility of these items and the analysis of preceding material. (Frazier and Rayner (1982: 199))

即時性の原則 (6) は，言語情報は入力されるやいなや即座に処理されるということを述べた原則である。Frazier and Rayner (1982) は言語処理の即時性を支持する証拠として，構造上曖昧な文の解釈に関わる眼球運動の計測データを提示した。

(7) [$_{Adv}$ Since Jay always jogs a mile] [$_{S}$ this seems like a short distance to him]]
(8) [$_{Adv}$ Since Jay always jogs] [$_{S}$ a mile seems like a very short distance to him]]
(Frazier and Rayner (1982: 184))

文を解釈するに当たり，(7) と (8) では，a mileが従属節の一部なのか，それとも主節の主語なのか，構造的な曖昧性が生じる。もし，言語情報の処理を即座に行っているとすると，二つの曖昧な読みのうちのどちらかを選択するはずである。そこで，(7)，(8) のいずれの文でもa mileは従属節の一部として解釈されたと仮定してみる。これは「遅い閉鎖」と呼ばれる方略をとったことになる。この方略に従えば，(7) では正しい解釈が得られる。しかし，(8) では，読み手が先を読み進め，seemsに出合ったところで，文頭に動詞が生じていることに気づき，この構文解析が誤りであると判断する。そして，先の仮定が誤りであったとして破棄し，改めてa mileがseemsの主語であるとの仮定に立って処理をやり直すことになる。このため，a mile以降の 1 文字あたりの平均読み時間を計測すると，(8) のほうが (7)より長い時間がかかることが眼球運動を計測したデータから明らかになった。

もし，ここで言語情報の処理を即座に行うのでなく，曖昧性を除去するような情報が得られるまで構文解析を保留し，処理を先延ばしにする，すなわち遅延処理（delayed processing）を行っていると仮定してみよう。すると，(7)，(8) の文はいずれも正しく処理されるので，構文解析を訂正するのに必要な時間はかからないことになり，結果として，(7)，(8) の文の処理時間には差は無いはずである。しかし，眼球運動を測定すると，両者の間には処理時間に有意な差があるという実験結果が得られた。このことから，構文解析の際には遅延処理ではなく，即時性の原則

に従っているということが明らかになった。

坂本（1998）によれば，即時性の原則は，英語のような主要部前置（head initial）型の言語では，文構造を決定するために必要な情報が比較的早い時期に出現するため，有効であると考えられる。しかし，日本語のような主要部後置(head final）型の言語では，文構造を決定する情報が文末，もしくは文末に近い位置に出現するので，即時性の原則を仮定すると，再分析を迫られる事例が英語より際立って多くなると考えられる。例えば，「車が」という名詞句で文が始まっていると，この名詞句を主語と解析し，次には自動詞が現れると予測するが，「欲しい」という動詞が続いた場合は，「車が」は主語ではなく目的語として構文解析するよう再分析が迫られる。

しかし，われわれの言語直感に従えば，「車が欲しい」という文を読んだり，聞いたりするたびに再分析しているとは思われない。日本語のような主要部後置型言語の構文解析には，ある種の遅延処理が関与していると考えられる。このことに関して，坂本（1998: 17）によれば，Inoue and Fodor（1995）は，構造の曖昧性が生じる可能性がある地点に（心的な）目印を付けておき，構造解析に失敗した時にその目印の位置に戻ってくるという方法（information-paced parsing）を提案した。また，Mazuka and Itoh（1995）は，新しく入力された要素を既存の構造内の要素に付加しても，確定的な情報が得られるまではその付加は暫定的なので，いつでも変更可能であるという暫定付加（tentative attachment）の方略を提案した。

２．２　袋小路文とコスト

Frazier and Rayner（1982）は，袋小路文は，通例，構造の再分析を伴うため，非袋小路文に比べ，解釈に関わるコストは増加すると次のように指摘している。

(9) If people do frequently commit themselves to analyses which they later must revise, then it is important to study the processes they employ to analyze sentences. These revision procedures bear much of the burden of predicting the over all processing complexity of sentences.（Frazier and Rayner（1982: 181））

これに対して，日本語の袋小路文を分析したMazuka and Itoh（1995）によれば，日本語を処理する際には広範囲にわたる再分析が求められると思われるが，日本語の袋小路文は英語の袋小路文に比べ，処理上の困難を伴うことが少ない，と次のように述べている。

(10) In the following section, we present several possible ways in which Japanese sentence processing might proceed, and show how each of these models predicts that processing a Japanese sentence should involve extensive reanalysis. We also show, however, that most of the sentences predicted to involve reanalysis are not associated with conscious processing difficulties comparable to English garden-path sentences.（Mazuka and Itoh（1995: 298））

さらに，Mazuka and Itoh（1995）は日本語には文処理上の困難に関わる３つの文法的特性があると指摘している。

(11) a．Japanese is a left-branching, head-final language.
　　b．Japanese allows scrambling of arguments and adjuncts.
　　c．Japanese allows productive occurrence of zero pronouns.（Mazuka and Itoh（1995: 298–299））

日本語は，(i）左枝分かれ，かつ主要部後置型言語であり，(ii）項と付加詞のかき混ぜ（scrambling）を許し，(iii）ゼロ代名詞の生起を許す等の文法的特性を備えているため，原理的には，広範囲にわたって再分析を求めることになる。しかし，実際の文処理の際には，再分析を必要とする事例は多くない。Mazuka and Itoh（1995)によれば，その理由の一つには，日本語には格を表す助詞が備わっているため，節の境界が明示され，文の構造が明らかになることが挙げられる。さらに，日本語は主要部後置型であることから，文解析が主要部に到達した時点で，解析の判断が下されるため，分析の誤りをあらかじめ回避することができると指摘されている。

２．３　語彙的曖昧性が関わる再分析

Mazuka and Itoh（1995）は語彙的曖昧性が関わる袋小路文の再分析について，次の例を紹介している。

(12) a. Mukoogawa-o osu-to mesu-no nihonzaru-no syasin-ga de-masu.
b. Mukoogawa-o [osu-to mesu]–no nihonzaru-no syasin-ga
c. [ϕ Mukoogawa-o osu]–to mesu-no nihonzaru-no syasin-ga de-masu (Mazuka and Itoh (1995: 309))

*osu*は他動詞「押す」と名詞句「雄」の両義に解釈できるので，(12a) は初めて提示されると意識的な再分析を求めることになる。接続詞to「と」は二つの節のみならず二つの名詞句を等位接続することができるので，ひらがなで*osu to mesu*と表記されると，(12b) のように「雄と雌」という等位名詞句の解釈が優先され，この解釈は*syasin-ga*までは破綻をきたさない。しかし，主節の動詞で文末の*demasu*の出現によって，(12c) のように*osu*は動詞「押す」と再分析されなければならなくなる。

(13) Eki-mae-no kooban-ni yoru to hiru-wa mie-na-katta huru-gao-no zyunsa-ga ita.
(Mazuka and Itoh (1995: 309))

(13) では，*yoru*は「寄る」と「夜」の両義の解釈が可能であるが，Mazuka and Itoh (1995: 309) によれば，この文では「夜と昼」が等位名詞句として優先的に解釈されるが，文末の*ita*に至って，*yoru*は「寄る」と再分析されることになる。

上記２例は，動詞を名詞と誤解したことによる袋小路文の再分析であるが，逆に名詞を動詞と誤解したために袋小路文になる例もある。

(14) a. Butai-no ue kara kamihubuki-o maku-ga yukkuri aku to doozi-ni hura-seru.
b. [Butai-no ue kara kamihubuki-o maku] ga yukkuri
C. [Butai-no ue kara kamihubuki-o [maku-ga yukkuri aku] to (Mazuka and Itoh (1995: 310))

(14a) では，*maku*は語彙的に「撒く」と「幕」の両義に解釈できる。さらに*ga*は等位接続詞と格助詞の２通りに解釈できる。このため，(14b) のように，*maku*は初めは動詞として，また，先行する名詞句*kamihubuki-o*をその目的語として分析することになる。ところが，２番目の動詞*aku*の出現により，袋小路文となるため，再分析が行われた結果，(14c) の解釈が得られるのである。

Mazuka and Itoh (1995) は，(12)，(13)，(14) の例は動詞と名詞の語彙的な曖昧性によるもので，その処理上の困難さは構造の再分析によるものではなく，誤った語彙項目 (wrong lexical item) の使用によるものである，と結論づけている (Mazuka and Itoh (1995: 310))。

Mazuka and Itoh (1995) は動詞の項の再分析が関与する場合，動詞内の語彙的曖昧性は袋小路文になる場合があると指摘している。

(15) Ginkoo-no torisimariyaku-ni tuita bakari-no sokutatu-o watasita. (Mazuka and Itoh (1995: 310))

(15) では，*tuita*は「(地位に) 就いた」と「着いた」の２通りに曖昧である。仮に*tsuku*の最初の解釈が「就く」として，着点を表す助詞「に」を伴い，文の解釈が*tuita bakari-no*に至ると，*Ginkoo-no torisimariyaku*は動詞の補語として分析され，この時点で「銀行の取締役に就いたばかり」と解釈されることになる。しかし，これに続いて*sokutatu-o watasita*に至ると，袋小路文であることに気づき，*tuita*は「着いた」と再分析され，*Ginkoo-no torisimariyaku*は*watasita*の項として解釈されることになる (Mazuka and Itoh (1995: 311))。Mazuka and Itoh (1995) は，袋小路文に関する上記のような分析から次の方略を提案している。

(16) The Tentative Attachment Strategy:
In Japanese, a parsing decision is tentative until the sentence is finished. By tentative, we mean that reanalysis of each decision will have a psychologically measurable cost (i.e., it is not cost-free), but any single reanalysis will not be costly enough to cause conscious processing difficulty. When reanalysis is combined with other complexities (e.g., lexical ambiguities, multiple reanalyses, pragmatic naturalness, etc.), it becomes increasingly costly and may become conscious. (Mazuka and Itoh (1995: 323))

Mazuka and Itoh（1995）の提案する暫定付加方略（Tentative Attachment Strategy）は，概略，日本語では文が終了するまで解析判断は暫定的であるという主張である。暫定的とは，再分析は心理的に測定可能なコストがかかるが，再分析が必要となっても，単一の再分析それだけでは処理上の困難を覚えるほどのコストはかからない，ということである。また，再分析は他の複雑性（例えば，語彙的曖昧性，多重再分析，語用論的自然らしさ等）と結びついたとき，その再分析はコストが増大すると知覚されることになる。この方略について，次の例で見てみることにしよう。

(17) a．[Yoko$_i$-ga kodomo-o [ϕ_i , ϕ_j koosaten-de mikaketa] takusii$_j$-ni noseta]
　　b．[kodomo-o [ϕ_i , ϕ_j koosaten-de mikaketa] takusii$_j$-ni noseta]
　　c．Kodomo-o [Yoko$_i$-ga [ϕ_i , ϕ_j koosaten-de mikaketa] takusii$_j$-ni noseta]
　　d．[ϕ_i kodomo-o [Yoko$_k$-ga ϕ_j koosaten-de mikaketa] takusii$_j$-ni noseta]

(17a）では，最初の動詞*mikaketa*に至った時点で文頭の二つの名詞句はこの動詞に暫定的に付加される。しかし，これらの二つの名詞句*Yoko$_i$-ga*と*kodomo-o*は*takusii$_j$-ni*に至った時点で，この暫定的な付加が誤りであることが判明し，再分析されることになるが，それぞれ主語位置からの名詞句の再分析と，目的語位置からの名詞句の再分析として区別する必要がある。この際，目的語位置からの名詞句の再分析は，動詞句接点（VP nod）と文接点（S node）の二つの接点を越えての再分析であるため多重再分析となり，結果として袋小路文として知覚されることになる。

暫定付加方略（16）は，新しく入力された要素をすでに分析してきた構造に付加する際，文末に至り確定的な情報が得られるまでは暫定的に付加する，と理解することができる。この方略では，付加は暫定的であるので，分析の過程において変更可能であることになる。坂本（1998: 18）によれば，日本語のような主要部後置型の言語では，動詞が文末に位置するため，文全体の構造を決定する重要な情報の出現が遅れることになり，暫定付加の方略はこのような日本語の主要部後置の特徴を組み込んだ言語モデルを構築するために提案されたものである，と指摘している。

2．4　再分析仮説

これまで，再分析という用語は袋小路文を紹介する際に非公式に用いてきたが，ここで再分析を寺内（2004）に従い，次のように定義することにする。

(18) 再分析処理とは，構文解析装置が構文解析が不適切であると認識した時点で，再度，文を読み返し（backtracking）たりして，問題箇所の統語処理を遂行する際に，最初に選定して試行した構文解析とは異なる，より適切であると判断された別の統語解析方略を選定して遂行することを言う。（寺内（2004: 123））

これに関連して，Frazier and Rayner（1982）は，再分析には次のような３つの可能な仮説があると述べている。

(19) a．前方再分析仮説（forward reanalysis hypothesis）
　　解析装置は解析が不適切であると認識した時点で，処理中の文の文頭に戻り，再度，最初から解析を遂行し，最初に遂行した解析とは異なる別の解析方略を選択して遂行するという仮説
　　b．後方再分析仮説（backward reanalysis hypothesis）
　　解析装置は構文解析が不適切であると認識した時点で，その箇所から逆行していき，最初に遂行した解析とは異なる別の解析方略を選択して遂行するという仮説
　　c．選択的再分析仮説（selective reanalysis hypothesis）
　　解析装置は構文解析が不適切であると認識した時点で，その原因と推定される箇所に戻り，そこから再び，最初に行なった解析とは異なる別の解析方略を選択して遂行するという仮説
（Frazier and Rayner（1982: 182））

さらに，Frazier and Rayner（1982）は，再分析についての上記３つの仮説のうち，（19c）の「選択的再分析仮説」が有効と思われると述べ，その理由を次のように指摘している。

(20) Though the selective reanalysis hypothesis needs considerable refinement before it will make precise claims about the parser's correction procedures, the essence of the hypothesis is the claim that the parser

> does not stupidly and automatically proceed through the sentence in one direction or the other regardless of the type of error involved; rather, the parser will use whatever information indicates that its initial analysis is inappropriate to attempt to diagnose the source of its error. If successful, this would permit it to selectively focus on just that portion of the analysis which was responsible for the particular problem it encountered with its first analysis. The selective reanalysis hypothesis thus predicts that the correction procedures which are involved in the reanalysis of a sentence may be very specific and will depend on the exact nature of the evidence which the parser has available to it. （Frazier and Rayner（1982: 182））

Frazier and Rayner（1982: 203-204）では，眼球運動を測定した結果，被験者が再分析を行なう際に，最初の構文解析で誤りに気づいた時点で，平均よりも長い凝視が起こり，その後すぐに曖昧性の生じた位置へと視点が逆行（regression）することが確認された。前方再分析仮説は，すべての逆行眼球運動は文の先頭に戻ることを予測する。しかし，実験から得られたデータは，予想に反して文頭への逆行眼球運動が見られたのは逆行が文末から始められたときのみであることを示している。また，後方再分析仮説についても実験データに矛盾する予測となることが明らかになった。これらの結果から，構文解析装置は不適切な構文解析を遂行したと判断した時点で，その原因と思われる箇所に即座に戻っていき，再分析が遂行される，すなわち選択的再分析を行っているのではないかと結論づけている（（坂本，1998: 18））。

本稿では，言語処理モデルに関わる議論について，即時性の原則（6），袋小路文とコスト，語彙的曖昧性が関わる再分析，暫定付加方略（16），選択的再分析仮説（19c）等の原則，方略，仮説の概要について述べてきた。次の段階として，これらの言語処理モデルを用いて，日本語の袋小路文を分析することになる。ここで，注目したいのは（21）の例を解析する際に，結果としては，（22b）ではなく，（22a）のように再分析することになるが，これはいわば百科事典的知識が発動されることによるものである。すなわち，袋小路文の再分析という統語論的操作には，語用論的情報が深く関与していると考えられる。

（21）ここではきものを脱いでください。（=(1)）
（22）a．ここで　はきものを　ぬいでください（=(2a)）
　　b．ここでは　きものを　ぬいでください（=(2b)）

次の例は新潟県のある県道で見かけた立て看板（21）の標語である。

（23）ごみだめ：ネ
（24）

この文も次の２通りに曖昧である。

（25）a．ごみ　だめ　ね！
　　b．ごみだめ　ね

(25a）は「ゴミを捨ててはいけません」という注意書きとして解釈できる。一方，（25b）は「‘ごみだめ’（ごみをためる）場所ですよ」と理解することができる。このことから，例文（23）も袋小路文であることがわかる。

次稿では，これらの興味深い袋小路文における再分析の言語モデルと，語用論における「取り消し可能性（cancelability）」がどのように関わっているかということについて分析，検討することにする。

*本稿は，平成25年～平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））（課題番号：25370546，研究代表者：加藤雅啓））の援助を受けてなされた研究の一部である。本稿を作成するにあたり，Ivan Brown氏からは有益なコメントを得たうえ，例文の判断にも協力いただいた。ここに記して感謝の意を表する。いうまでもなく，本稿の不備は著者のみの責任である。

参考文献

Ariel, Mira（2010）*Defining Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.

Blakemore, Dian（1992）*Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell, Oxford.

Carston, Robin（2002）*Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Verbal Communication*, Blackwell, Oxford.

Carston, Robin and Seiji Uchida（1998）*Relevance Theory: Applications and Implications*, John Benjamins, Amsterdam.

Fox, Barbara（1987）*Discourse Structure and Anaphora: Written and Conversational English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Fox, Barbara ed.（1996）*Studies in Anaphora*, John Benjamins, Amsterdam.

Frazier, Lyn and Keith Rayner（1982）"Making and Correcting Errors during Sentence Comprehension: Eye Movements in the Analysis of Structurally Ambiguous Sentences," *Cognitive Psychology*, 14, 178-210.

Givón, Talmy（1990）*Functionalism and Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.

Grice, Paul（1975）"Logic and Conversation," *Syntax and Semantics* 3: *Speech Acts*, eds. by Peter Cole and Jerry Morgan, 41-58, Academic Press, New York.

Grice, Paul（1989）*Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.

Grosz, Barbara（1977）"The Representation and Use of Focus in a System for Dialogue Understanding," Ph. D. thesis, University of California, Berkeley, California.

Grosz, Barbara（1981）"Focusing and Description in Natural Language Dialogues," *Elements of Discourse Understanding*, eds. by Arvind Joshi, Ivan Sag and Bonnie Webber, Cambridge University Press, Cambridge.

Inoue, Atsu and Janet Dean Fodor（1995）"Information-paced parsing of Japanese," *Japanese Sentence Processing*, eds. by Reiko Mazuka and Noriko Nagai, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ.

加藤雅啓（2000）「談話における結束性とその指導（1）－同一物指示について－」『上越教育大学研究紀要』19-2，733-745.

加藤雅啓（2013）「談話における代名詞の指示機能－話題指示と保留指示－：機能文法理論と認知語用論の棲み分け」『言語学からの眺望 2013』福岡言語学会（編），28-40，福岡言語学会40周年記念論文集　九州大学出版会，福岡.

加藤雅啓（2015）「「取り消し可能性」をめぐる議論について」『上越教育大学研究紀要』34，187-194.

加藤雅啓（2015）「コード化された意味と推論による意味－統語論と語用論の棲み分け－」『言語研究の視座 －坪本篤郎教授退職記念論文集』77-92，開拓社，東京.

Katz, Jerrold（1977）*Propositional Structure and Illocutionary force: A Study of the Contribution of Sentence Meaning to Speech Acts*, T. Y. Crowell, New York.

Kempson, Ruth（1975）*Presupposition and the Delimitation of Semantics*（Cambridge Studies in Linguistics 15）, Cambridge University Press, Cambridge.

Kempson, Ruth（1977）*Semantic Theory*, Cambridge University Press, Cambridge.

小泉保（2000）『言語研究における機能主義－誌上討論会－』くろしお出版，東京.

Kuno, Susumu（1976）"Subject, theme, and the speaker's empathy: a reexamination of relativization phenomena," *Subject and Topic*, ed. by Charles Li, 417-444, Academic Press, New York.

Levinson, Stephen（2000）*Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Mazuka, Reiko and Kenji Itoh（1995）"Can Japanese Speakers Be Led Down the Garden Path?," *Japanese Sentence Processing*, eds. by Reiko Mazuka and Noriko Nagai, 295-329, Lawrence Erlbaum Associates Publishers, New Jersey.

中島平三（1995）「主語からの外置－統語論と語用論の棲み分け－」高見健一（編）『日英語の右方移動構文－その構造と機能－』17-35，ひつじ書房，東京.

Otsu, Takahiro（2010）"Procedural Information of Anaphoric Expressions : Pronouns, Ellipses and Metarepresentations,"『言語文化論究』25，113-129，九州大学.

Reboul, Anne（1997）"What（if anything）Is Accessibility? A Relevance-Oriented Criticism of Ariel's Accessibility Theory of Referring Expressions," *Discourse and Pragmatics in Functional Grammar*, eds. by John Connolly, Roel Vismans, Christopher Butler, and Gatward, Richard, 91-108, de Gruyter, Berlin.

Reboul, Anne（1998）"A Relevance Theoretic Approach to Reference," paper delivered at the *Acts of the Relevance Theory Workshop*, University of Luton, 45-50.

Recanati, François (2004) "Pragmatics and Semantics," *Handbook of Pragmatics*, eds. by Laurence Horn and Gregory Ward, 442–462, Blackwell, Oxford.

坂本勉 (1998)「人間の言語情報処理」大津由紀雄，坂本勉，乾敏郎，西光義弘，岡田伸夫（編）『言語の科学11　言語科学と関連領域』1–55，岩波書店，東京.

高見健一 (1995)『日英語の右方移動構文－その構造と機能－』ひつじ書房，東京.

Tao, Liang (1996) "Topic Discontinuity and Zero Anaphora in Chinese Discourse: Cognitive Strategies in Discourse Processing," *Studies in Anaphora*, ed. by Barbara Fox, 487–513, John Benjamins, Amsterdam.

寺内正典 (2004)「第 2 言語統語処理における再分析－ θ 再解析と閉鎖の問題を中心として」法政大学多摩論集編集委員会（編）『多摩論集』119–151.

Uchida, Seiji (1998) "Text and Relevance," *Relevance Theory: Applications and Implications*, eds. by Robin Carston and Seiji Uchida, 161–178, John Benjamins, Amsterdam.

内田聖二 (2000)「定冠詞の機能－関連性理論の視点から－」小泉保編『言語研究における機能主義－誌上討論会－』105–124，くろしお出版，東京.

内田聖二 (2011)『語用論の射程－語から談話・テクストへ－』研究社，東京.

Wilson, D. and D. Sperber (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90: 1/2, 1–26.

Reanalysis and Cancelability of Garden-path Sentences (1)

Masahiro KATO*

ABSTRACT

This article pertains to reanalysis and cancelability of sentence interpretations in English with special attention to garden-path sentences. The main points argued here are (i) that coded aspects of interpretations, correlating to specific linguistic forms, are independent of context, and cannot be canceled, and thus are considered to be the issues of grammar, and (ii) that inferential aspects of interpretations are dependent on context, and can be canceled, and thus are considered to be the issues of pragmatics, and (iii) that reanalyses of garden-path sentences depend not only on syntactic and semantic structures but also on pragmatic information derived from encyclopedic knowledge or context of utterances. In the course of discussion, I have introduced some of language processing models relevant to the current discussions; the immediacy principle, the tentative attachment strategy, and the selective reanalysis hypothesis.

* Humanities and Social Studies Education